現行史蹟名勝天然紀念物 保存制度批判

正會員 小 寺 駿 吉

序 言

我が國に於て、史蹟名勝天然紀念物保存制度が法律的根據の上に確立せられて以來、昨昭和14年を以て滿20年に相當することは、既に周知に屬する所である。而して其間、本制度が我が國一般文化に貢獻したる所決して少からざるは、之亦更めて言ふを要しない。けれども此の20年以上の歲月の流は、同時に本制度の運用にあたつて、様々の問題を經驗させたことであらう。私は、我々造園關係者も亦その独自の立場より、本制度の機構を充分検討し、そのより實質的な發展に資すべきであることを信ずるが故に、茲に敢て本問題を採り上げた次第である。

惟ふに本問題の究明には、先立つて史蹟名勝天然紀念物保存事業が如何なる徑路を辿つて制度化するに到つたか、その沿革についても考察する必要があるが、今は最も論議の對象となるべき二、三の要點を列挙しておきたい。

I

まづ最初に、史蹟名勝天然紀念物保存法第1條第2項⁽¹⁾⁽²⁾に基く所謂假指定について見るに、その趣旨そのものは勿論極めて適切妥當である。即ち例へば、地方長官が、保安林の編入に關し必要ありと認むるとき、當該森林に於ける木竹の伐採を停止することが出来るのと同様の趣旨と解釋することが出来るのである。然るに此の伐採停止期間に對しては1ヶ年を超ゆる能はざる旨が規定せられてゐる（森林法第25條）のであるが、史蹟名勝天然紀念物の假指定に對しては法律上何等期間が示されておらず、而も實際上、假指定のままに保留せられつ

註

- (1) 史蹟名勝天然紀念物保存法第1條

本法ヲ適用スヘキ史蹟名勝天然紀念物ハ内務大臣之ヲ指定ス

前項ノ指定以前ニ於テ必要アルトキハ地方長官ハ假ニ之ヲ指定スルコトヲ得

- (2) 史蹟名勝天然紀念物保存法に「内務大臣」¹⁾とあるは、今日に於ては凡て「文部大臣」なること勿論なるも、念のためここに附記しておきたい。

つある史蹟名勝天然紀念物は、本年2月末日現在に於て、200件に垂んとし、のみならず其の半ばは大正時代の指定にかかるものである。但し之等假指定物件の9割以上は「史蹟」なる故、従つて夫等の占有面積は概して比較的小なりと見做すことが出来るが、中には必ずしも然らざるものも認められるのである。即ち例へば、富士山麓の山梨縣側、面積40,500町歩は大正13年3月山梨縣知事により「名勝」として假指定せられ、爾來今日迄16年の久しきに及んで居るのである。事實かくの如きものなる以上、假指定は必ずしも緊急を要する場合の處置のみとは見做しがたく、寧ろたとひ地方長官に於て指定の價值ありと認むるも、文部大臣之を承認するに到らず、云はばその價值が地方的なる程度に止まり、國家的水準には到達し得ざる程度の、史蹟名勝天然紀念物を對象とするものにあらずやとも、理論的には一應解釋せられるのである。

然るに又注意すべきは、史蹟名勝天然紀念物保存法第1條第1項の規定に基く文部大臣指定の史蹟名勝天然紀念物には

第1類 國家的ノモノ

第2類 地方的ノモノ

の二種類が存するといふことであつて（大正9年6月21日内務省告示第51號）、此の「第2類地方的ノモノ」こそは理論上並に實際上、假指定による史蹟名勝天然紀念物と混同せらるる懼があるのである。

抑々史蹟名勝天然紀念物保存法なる法律によつて、文部大臣が指定する所の史蹟名勝天然紀念物の價值に、國家的のもの、地方的のものとの差別の存することが既に不合理である。國家的水準に達し得ざる史蹟名勝天然紀念物ならば、最初より文部大臣が態々指定するに及ばざる筈であらう。斯くして史蹟名勝天然紀念物保存法が、一方に於て地方長官に史蹟名勝天然紀念物假指定の權限を與へておきながら、他方に於て文部大臣が本來地方長官の權限に屬せしむべき地方的の史蹟名勝天然紀念物の指定までを自ら行つてゐるのは大なる矛盾と考へざるを得ない。

又假指定がいつまでも假指定のままに保留せられるとしたならば、假指定を受けたる史蹟名勝天然紀念物の法律的意義すら薄らいで來るのも必然であらう。若し假指定なる處置が、史蹟名勝天然紀念物を、「第1類國家的ノモノ」「第2類地方的ノモノ」の孰れかに決定するまでの暫定的な處置であるとしたならばそれは確に有意義であらうが、その場合は第2類の史蹟名勝天然紀念物と決定したるものは、當然文部大臣指定の史蹟名勝天然紀念物中より除外せらるべきであらう。然るに第2類のものも、第2類と明示せられつつ現に文部大臣指定の史蹟名勝天然紀念物の中に數へられてゐる反面、他に假指定の史蹟名勝天然紀念物も多數並び存し、更に又法律によらずして地方長官が指定し、標識を立つる所の史蹟名勝天然紀念

物が全國各地に夥しく散在してゐる事實は、史蹟名勝天然紀念物保存事業のあまりにも無統制なるを物語るものではなからうか。尤も此の地方長官による所の假指定についても、大正11年6月22日に到つて、豫め本省と打合せすべき旨の通牒が當時の内務大臣官房地理課長より北海道廳長官府縣知事宛に發せられてゐるが、これこそ却て、假指定をして緊急の處置たることを妨げる所以でもあり、同時に又法規の混亂ではなからうか。而もかかる大正11年6月22日の通牒あるにも拘らず、其後假指定を受け、永くそのままに保留せらるる物件が多數存在し、その中には前述の「名勝富士山麓」の如き好ましからぬ實例すら見出されるのである。

II

次に史蹟名勝天然紀念物保存法第4條第2項⁽³⁾に基く損害補償の問題について少しく觸れてみたい。

史蹟名勝天然紀念物が、一旦文部大臣によつて指定せられたる以上、之に對して法律による種々の禁止、制限が加へられ、又命令が發せられるのであり、同時に之によつて損害を蒙りたる私人に對しては、政府によつて補償が行はれることは之亦いふまでもない。而して法律の文面通りに解釋すれば、損害補償の規定あるが故に、法律に違反したる者に對する處分も亦相當重いのである。然るに政府がかかる損害に對して充分なる補償を行ひ得るといふ可能性は勿論到底考へられない。又管理者の負擔にかかる保存施設費に對する國庫補助金の如きも、一般には、最高500圓といふ程度である。(大正14年6月24日内務省發理第70號「史蹟名勝天然紀念物ノ保存施設等ニ關スル件依命通牒」)。のみならず、史蹟名勝天然紀念物保存關係の手續は概してあまりにも煩雜にして、結局史蹟名勝天然紀念物の所有者乃至管理者と監督官廳との間に有機的な連繫が保たれ得ないのではなからうか。

今例を庭園に採つて見るならば、京都大徳寺大仙院の庭園は、大正13年12月に「史蹟及名勝」に指定せられたが、その僅數年後には、彼の瀧口の石組に向つて右側の土塀は無暴にも取毀され、その造園作品的價值に殆ど致命的な傷害が加へられた事實は、少くとも庭園研究

註

(3) 史蹟名勝天然紀念物保存法第4條

内務大臣ハ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關シ地域ヲ定メテ一定ノ行爲ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施設ヲ命スルコトヲ得

前項ノ命令若ハ處分又ハ第二條ノ規定ニヨル行爲ノ爲損害ヲ蒙リタル私人ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府之ヲ補償ス

尚ここに便宜上同法第2條をも併せて掲げておきたい。

史蹟名勝天然紀念物ノ調査ニ關シ必要アルトキハ指定ノ前後ヲ問ハズ當該吏員ハ其ノ土地又ハ隣接地ニ立入り土地ノ發掘障礙物ノ撤去其ノ他調査ニ必要ナル行爲ヲ爲スコトヲ得

者の間には熟知に屬するであらう。

又數年前、東京に於ける江戸時代の代表的名園蓬萊園は、我々の眼前からみすみす無慘に壊滅し去つた。而して問題は、たとひ蓬萊園を、史蹟名勝天然紀念物保存法によつて指定するとしても、所有者に對する補償といふ點が難關であつたといふことに歸着するであらう。然りとすれば、現行史蹟名勝天然紀念物保存制度の手の伸び得る範圍は永久に極めて狭く限定せられてしまふであらう。繚つて世界各國の事情を考ふるに、各國夫々各種の補助的別働團體が存在して盛んに活動し、就中例へば、1895年英吉利に創設せられたる“The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty”の如きは、古建造物、歴史的紀念物のみならず、丘陵、斷崖、湖沼、森林等の類ひに到るまで、續々賣收保存をなしつつあるのである。されば我が國の史蹟名勝天然紀念物保存事業を徹底させるためには、是非共斯の種の有力なる補助的別働團體が組織せられなければ、第二、第三の蓬萊園問題は必ずや今後も續出するであらう。要するに充分なる補償の實力なくしては、結局保存上の強制力も伴はないといふことを、現實の問題は物語つてゐるのである。

III

轉じて、史蹟名勝天然紀念物指定の標準となれる所の「史蹟名勝天然紀念物保存要目」について一言したい。

本要目も、大正9年1月の決定以來、既に幾度か改正せられてゐるが、猶依然として取捨整理の餘地が残されてゐる。殊に「名勝」の部に到つては甚だ概念的にして曖昧なる項目も少くはない。又指定の場合の、種別の亂雜不統一も否定しがたい。例へば、「史蹟及名勝」、「名勝及史蹟」の種別、又「名勝及天然紀念物」、「天然紀念物及名勝」の種別の如き、徒に煩はしきのみならず、保存上の實際的效果に何等の影響なく、學問的にも果して幾何の意義の存するやを疑はしめるのである。更に又指定の實例に徴すれば、史蹟以外の對象に關してまでも、歴史的因縁の偏重せらるる傾向も亦見逃しがたい。

註

- (4) 指定物件が國有林に屬する場合などには、かかる處置の講ぜられることも稀には見出される。例へば「史蹟及名勝嵐山」に對して大阪營林局が風致的森林施業を行へるが如きは、國有林獨自の立場から言つても當然ではあるが、兎も角記憶せらるべき一例である。

又斯の種の問題として特に注意せらるべきは、或特定の森林景觀否廣義の植物景觀が現に陽性の植物によつて構成せられてゐる場合である。例へば九州高山地帯の中腹以上を飾れるミヤマキリシマの群落の中には既に天然紀念物に指定せられたる例(雲仙岳池ノ原に於けるもの)もあるが、元來このミヤマキリシマは著しき陽性の樹種なるが故に、その群落を放置すれば、早晚侵入し來る他の、より耐陰的な樹種によつて漸次壓迫せられ、驅逐せらるるは群落遷移上必然の運命である。そして既に各所に於てその危機に瀕せることは、今日まで幾度か、諸方面より警告せられてゐるのである。

史蹟名勝天然紀念物保存事業は、要するに現状維持主義の事業である。だが、さればと言つて、その保存の目的を遂行するための、技術的處置が等閑に附せられていい筈は決してない。

例へば、⁽⁴⁾ここに「史蹟」、「名勝」乃至「天然紀念物」に指定せられたる森林風景地ありとする場合、その「名勝」的價值を永く確保するためには、當然合理的なる風致的森林施業を必要とすべき理なるも、法律はかかる點について觸るる所なく、管理者も亦煩雜なる手續を厭ふてか、放任主義を採るのが普通であるが、その結果風致上好ましからぬ林相惡化を招くことのあるべきは明白である。

又原始林にして天然紀念物に指定せらるる例は相當數多いが、元來原始林なるものについて注意すべきは、夫等が夥しき過熟林木によつて充たされながら、健全なる壯齡林木に乏しく、而も稚樹に到つては稀である場合が屢々あり得るといふ事實である。この現象は、自然人文兩方面より検討せられなければならないが、何れにせよ、林分構成状態の不健全なことは認めざるを得ないのである。かかる不健全なる原始林を、當然いつかは來るべき颱風の前に、何等の技術的對策を施さずして放置することの如何に不合理なるかは、之亦更めて説くまでもないであらう。

扱史蹟名勝天然紀念物は、その風致的價值が大なれば大なる程、之を訪るる者の數も亦多く、訪るる者の數が多ければ多い程、當該史蹟名勝天然紀念物の毀損せらるる危險率も亦増大するを免れない。然りとすれば、寧ろ最初から、技術的立場より、積極的に、史蹟名勝天然紀念物を保護することが賢明である。即ち例へば、天然紀念物に指定せられたる原始林に對してすらも、或程度の探勝歩道を設定することは、探勝者をして、その原始林の景觀を快く味はしめ得ると同時に、他方探勝者をして、濫に林地を侵さざらしむるためにも亦效果的である。結局史蹟名勝天然紀念物保存事業は、史蹟名勝天然紀念物保存を主眼とする一種の造園事業たるの内容を持たなければならぬのであつて、その爲には、現行關係法規に、技術的内容を含む所の、或程度の改正を施すことが、勿論最も先決問題であると考へられるのである。

〔昭和十五年四月五日 日本造園學會講演〕